

中期取組目標実現に向けた「三つのプラン」

学校教育目標

「ともに学び ともに高め合い ともにかがやく」
・すすんで学び合い、考えを深める子(知)(開)
・自分も友達も大切に、集団の中で自分らしさを発揮できる子(徳)(公)
・健康に関心をもち、心身共に成長する子(体)

教育課程全体で 育成を目指す資質・能力

・自己実現に向けて、自主的に考え、課題解決をする力
・自分らしさを発揮するとともに多様性を尊重して協働する力
・相互に考えを伝え、深め合い、合意形成する力

具体化した資質・能力

自分も他者も大切に、多様性を尊重する態度
他者との関わりの中で主体的に学び、次の学びに活かす力
社会の課題を解決しようとする力

中期取組目標

○SDGs(持続可能な開発目標)の視点を軸に、子どもたちが「主体的・対話的で深い学び」を通じて、地球の未来を語り合い、すべての人が豊かな暮らしを送ることができる社会の担い手を育てます。
○自分も友達も大切にでき、一人ひとりが自己有用感をもてることを目指した、クラス運営・学年運営、異学年交流等を行います。
○健康な心身をつくるため、家庭・地域と連携し、生活習慣や運動習慣を形成します。
○地域での豊かな体験を通して、まちの一員としての自覚をもち、まちをよくしようとする態度を育みます。
○一人ひとりを大切に、個に応じた「成長」を支援します。

学力向上アクションプラン

Table with 2 columns: 重点取組分野 (授業改善), 具体的取組 (①重点教科である「道徳科」を中心に、自己を見つめて考えを深める授業づくりを研究する。子ども自らが日常生活の中で問題意識をもち、問題解決的な学びを展開できるように工夫を施す。②今年度も人・もの・ことと豊かに関わる場を工夫し、相手意識や目的意識をもった活動を取り入れた授業を行う。)

学力向上に関わる本校の状況

①学力に関わる児童の実態
横浜市学力・学習状況調査等の結果からは、学力は全体的に横浜市の平均を上回っている。しかし、学習意識、生活意識がやや低い学年もある。学力が高いにも関わらず、自己評価があまり高くない傾向が見られる。また、教科等の学習が好きではないと回答している児童も存在する。

学力が高い要因として、家庭での学習習慣が身に付いている児童が多く、塾や習い事など、学校以外での学習を行っている児童も比較的多いことによるものが考えられる。一方で、塾や習い事で忙しく、ストレスを感じている児童もいるようだ。学校の学習の中で自己有用感を高められる活動が求められる。

②これまでの学校の取組状況
令和5年度より重点授業研究として「国語科」に取組み、児童が人・もの・ことと豊かに関わり、相手意識を持った言語活動に取組み、協働的に学ぶ力を育成した。令和8年度からは重点授業研究として「道徳科」に取組み、自他を大切に、互いに認め合ってよりよく生きようとする子を育成していく。

駅や商店だけでなく、公園や畑も近くにあり、地域の教育材に恵まれている。一方で感染症対策によって一度途切れてしまった、これまで本校が培ってきた人とのつながりを再度大事にして、学びのある活動を取り入れる必要がある。

経年数数の少ない教員が多く、教師力の向上を目指し、組織的に対応する必要がある。

今年度の目標

学校教育目標の「ともに高め合い」に向かって、道徳の授業を中心に、子どもが道徳的価値を把握し、自分事として捉え、考えを深める姿を目指す。人・もの・ことと関わる中で、多面的・多角的なものの見方・考え方ができる子を育成する。

目標を実現するための具体的行動プラン

今年度より始める重点授業研究「道徳科」では、「自他を大切に 互いに認め合って よりよく生きようとする子の育成」を研究主題として、「自己を見つめて考えを深める授業をめざして」を副題に研究を進める。
特別支援教室として「にっこりルーム」を運営し、取り出しによる学習のフォローや学校生活上のとまどいや不安への対応等を丁寧に行う。
教科分担制や専科制(音楽科・外国語科)、チームでの学年経営を生かして、多くの教員の視点の中で児童一人ひとりに最適な支援を提供する。同時に放課後に指導方法について議論を多くすることで教員それぞれがもつ強みを共有し、若手教員のOJTにつなげる。
児童の発達段階や個の特性に応じてGIGA端末の活用を進め、ICTを活用した課題解決型の学習を進める。
協働的な学習を通して、友達と一緒に課題を見つたり達成したりする中で、一人ではなく複数の友達と学習することの楽しさや達成感を味わうことができる授業をつくっていく。
各学年では教科横断的な学習を進められるように、前学年以前にすでに学んだことを活かして新たな課題を解決できるような適切な課題を設定する。

上半期
下半期

豊かな心の育成推進プラン

Table with 2 columns: 重点取組分野 (人権教育), 具体的取組 (①学級だけでなく、学年、たてわり、クラブ、学校行事など、多様な集団の中で学習・活動する機会を増やし、他者も尊重する意識を高める。②道徳の授業やSDGsの視点を軸に、すべての人が心豊かな暮らしを送ることができる社会について考え、実行しようとする態度を育てる。)

豊かな心に関わる本校の状況

①豊かな心に関わる児童の実態
横浜市学力・学習状況調査等の結果からは、学力は全体的に横浜市の平均を上回っているにも関わらず、自己評価があまり高くない傾向が継続して見られる。
「Y-Pアセスメント(子どもの社会的スキル横浜プログラム)」や「心とからだアンケート」を用いた、児童一人ひとりの実態把握によると、自己肯定感・自己有用感の低い児童が各クラスに数名いることが分かっている。
学習課題や当番活動に真剣に取り組む、家族や教師、友人の期待に応えようと努力しているが、自己肯定感が低く、間違いや失敗を恐れるあまり、積極性や創造性に課題が見られる。
過去の感染症対策の影響等で、様々な場面でコミュニケーションを取りづらかった状況が、児童の心の成長に与えた影響も少なからずあると考えられる。

②これまでの学校の取組状況
学年での活動やたてわり活動、クラブ活動、学校行事などを通して、集団や社会の一員であることを実感できる機会を増やすことができた。
司書教諭と学校司書を中心に学校図書館の環境整備を進め、読書活動や読み聞かせ等を充実させ、豊かな感情を育ててきた。
学校生活の中で児童が互いに触れ合う時間も増え、経験としての道徳性を養う機会が増えた。さらに、道徳科で各学年や学級の児童の実態に応じた授業展開や教材の扱い方などを共同研究し、児童一人ひとりの豊かな心を充実させている。

今年度の目標

自分らしさを発揮できる機会を増やし、自分を大切にできる子を育てる。
人と関わる機会を増やし、他者を尊重しようとする子を育てる。

目標を実現するための具体的行動プラン

学級内での信頼関係の構築が大事になることから、教師と児童の信頼関係や児童相互の人間関係を育て、一人ひとりが自分の考え方や感じ方を伸び伸びと表現することができる雰囲気、日常の学級経営の中でつくるようにする。
特別活動での「ペア活動」の異学年交流を計画的に行い、コミュニケーション能力や助け合いの精神を育み、「豊かな心」に向けた教育活動を行う。
道徳科では、一人ひとりの思いや考え方を生かせる授業を展開したり、集団でのゲームなどを取り上げたり、「だれもが「安心して」「豊かに」を目指した人権教育を行う。道徳学習の積み重ねと成長を実感できるような学習記録を工夫していく。
Y-Pアセスメントを効果的に活用し、児童個人や学級の状態を把握し、クラス経営に役立てる。また、多様な集団の中で学習・活動する機会をさらに増やす。
総合的な学習の時間・生活科等において、SDGsの概念を発達段階に応じて学習し、すべての人が心豊かな暮らしを送るにはどうしたらいいか考えたり、取り組んだりする時間を設ける。
読書環境や読書活動を充実させ、表現力や想像力を高め、豊かな感性を育む。

上半期
下半期

健やかな体の育成プラン

Table with 2 columns: 重点取組分野 (健やかな体の育成), 具体的取組 (体力向上やけがの予防などの課題に対して、学校保健委員会や運動委員会の活動を通じ、児童が本校の健康課題について意識し、どのようにすれば課題を解決できるのか考える機会を充実させ、対応を検討し、課題解決を目指す。)

健やかな体に関わる本校の状況

①健やかな体に関わる児童の実態
令和7年度横浜市体力・運動能力調査の結果によると、体力・運動能力は男女ともに1・2・4年生は横浜市平均よりやや低い傾向が見られるが、3・5・6年生は平均とほぼ同じか高い傾向がみられる。生活実態は女子は1年生と6年生は横浜市平均より低く、2～5年生は平均とほぼ同じ傾向であった。また男子の生活実態では1・2・4・5年生は横浜市平均とほぼ同じであったが、3・6年生は平均より低い傾向が見られた。
体力・運動能力について全国平均と比較すると、男子は3年と5年は平均を超え、その他の学年は全国平均を下回っている。女子は、3年は全国平均を超え、5年は全国平均とほぼ同等であったが、それ以外の学年は全国平均を下回っている。

令和7年度に学校で起こったけがの発生件数は1609件。そのうち、首から上のけがは616件発生した。特に、「お互いによそ見をしていてぶつかった」「お互いに走っていて止まらずぶつかった」など、危険予測ができず発生した危険なけがが多い状況である。このようなけがを減らすために、危険を予測し安全な行動がとれる児童の育成を目指す活動が必要であると考えます。

②これまでの学校の取組状況
体育科では、体づくり運動領域を重点領域とし、指導方法を深めてきた。体力と高める運動として「持久走」や「縄跳び」を行ってきた。

ジャングルジム改修や不用品撤去などで校庭の整備を行い、児童が休み時間等にしつかりと体を動かせる環境を整えた。

学校保健委員会では、保健委員の児童が中心となり、全校児童の生活習慣の実態把握のため、アンケートを行い、その結果から効果的な取り組みを提示し、全校で取り組んできた。

今年度の目標

体力や健康に関するアンケートや調査などのデータから、自らの健康状態や体力などの実態を把握し、自分自身や全校の健康や体力に関する課題を解決できる子を育てる。

目標を実現するための具体的行動プラン

体育科では児童の活動量を確保し、体づくり運動を重点領域とした学習を行う。
体育科、特別活動では、集団でのゲームやクラスでのレクリエーション活動などを通して、粘り強くやり遂げる態度、協調性、運動に親しむ習慣を身に付ける。
体力テストをペア学年で実施することで、他者と協働しながら自らの体力を理解し、体づくりに役立てる。
休み時間に校庭でボール遊びに親しめるようにボールをクラス配当するなど、環境を整える。
家庭科や給食の時間を通じて、栄養やマナーなどの食育を行う。
学校保健委員会では、「けがの予防」をテーマとして、児童のけがに対する意識調査を行い、危険な行動を防ぐための取り組みについて、保健委員の児童が主体となり全校に発信していく。

上半期
下半期